

# 生きるということ

げんだい せいねん じぶんじしん いしき ちょうさ み  
現代の青年が自分自身をどう意識しているかという調査を見ている  
と、たいへん印象的なことがあります。それは、「憧れる」とか「思い悩  
む」といったような項目が、男女の区別をこえて、とびぬけて高い回答と  
してあがっていることです。

じだい せいねん ききょうつう しんり よ  
ここには、時代のちがいをこえて、青年期共通の心理を、よく読みとる  
ことができるのではないのでしょうか。つまり、現実の自己から理想の自己に  
たか おも じぶんじしん ふか み  
高まりたいという思い、あるいは自分自身のところを深く見つめたいという  
ないめんか よつきゆう しんり せいねん  
内面化への欲求 といってよいものです。こうした心理は、むかしから青年  
とくゆう してき こんにち か  
に特有のものとして指摘されてきましたが、今日でも変わっていないように  
おも  
思われます。

かんれん ひごろ わか ひと せつ き  
それと関連して、日頃、若い人たちと接してよく気づかされる、いま  
ひと わか ひと じぶん たにん ただ りかい  
一つのことがあります。若い人たちは、自分はどうも他人から正しく理解さ  
れていないという悩み、いらだたしさをもっているのではないのでしょうか。現  
たにん み じぶん すがた じぶん すがた  
に他人から見られている自分の姿は、じつはほんとうの自分の姿ではない  
のだ、という思いなのです。ここには、若い人たちが一人ひとり、自分は他  
にん せんざい どくじ じこ にんげん  
人とちがった存在であり、独自の自己をもった人間なのだ。そうでありたい  
ねが せつじつ きも わか ひと じぶん  
と願っている、切実な気持ちがみられます。そのことは、若い人たちが自分

自身じしんにたいする関心かんしん、「私わたしは**な**に何ものなのか」という問いを、いまももちつづけていることあらの表われではないでしょうか。このように自己じこにたいする問いに目覚めるといことは、自分じぶんの**せかい**の**めざ**に目覚める**だ**第一歩だ**おも**と思います。

ところで、この**せかい**というものについて、おそらくきみたちも、**ぼくぜん**こんなふうかんがに考かんがえているのではないのでしょうか。つまり、**せかい**というものは、私わたしたちが生まれ落ちると同時どうじに自然しぜんに身みに備そなわっているものだ、と。このように考かんがえている人は、意外いがいに多いおおのではないか**おも**と思います。しかし、これは、まったくのまちがいなのです。人間にんげん的な感動かんどうとか、**せかい**この**せかい**にたいする感受性かんじゆせいと**ひ**いったようなものは、つね日頃ひごろから私わたしたちが**やしな** **そだ**てい**み**かないと、身みにつかないものなのです。

それは、**おな**ちょうど私わたしたちが大学だいがくに入はいって専門せんもんの勉強べんきょうをするのと同じで**おな**す。たとえば法学部ほうがくぶの学生がくせいであれば、法律学ほうりつがくというもの**きほん**的な概念がいねんから勉強べんきょうを始めて。四年間よねねんかけて、ようやく法律ほうりつの体系たいけいとは**おな**どのようなものか**おな**という専門せんもんの知識ちしきを身みにつけるわけ**おな**です。これに反はんして、**せかい**この**せかいに**おな**いては、みんな意外いがいと安易あんいに考かんがえているよう**おな**です。そんな特別とくべつの勉強べんきょうな**おな**どなしに**おな**でも、生まれながらに身みについている**おな**と思っています。しかし、け**おな**って**おな**そうではありません。私わたしは三〇年間さんじゅうねんかん、大学だいがくで若い人わかたちと**おな**多くの**

であ かさ  
出会いを重ねてきました。そうしたなかで、こころを育てるといふ訓練をい  
ままでしてこなかった若い人が、だんだん増えてきていることに気づかされ  
ています。そういう人は、ほんとうの意味で、こころをもっていないのです。

こころをもっていない人がいるということは驚くべきことです。あまり大  
胆なことを言うとあちこちに差し障りがでてきそうですが、大学入試の

難しい学部がくぶの学生ほど、こころが育っていない感じがします。受験勉強

に追われて、こころの世界をかえりみるゆとりのなかったことの表われなの  
でしょうか。そのような意味で、こころというものは育てるものなのだとい

うことを最初にお話しておきたいと思います。私たちは、日頃から、自分  
のこころの畑を耕して、たえず水を注ぎ、肥料をほどこして、豊かな土  
地にかえていかななくてはならないのです。

みやたみつお  
宮田光男